

■矢口新の教育思想と実践の研究：活動報告－水海道②

水海道小での実践から学んだこと

－インタビュー調査：教師の力量形成について－

矢口新研究の一環として、昭和20年代後半～40年代にかけて、「学習者一人ひとりを育てる学習」に取り組んだ水海道小学校(*)の元教師、倉持正氏、飯村一男氏、大久保団治氏、飯沼敦氏に上記のテーマでインタビューした。(2008/8/7)



左から 倉持，飯村，大久保，飯沼の各氏
(水海道小学校応接室にて)

教師にとって一番大事なこと

「学習者一人ひとりをそれぞれ育てること。そのための、学習者一人ひとりの実態を読み取る力、引き出す力が重要。学習者に質問することが大事」(飯村氏)「研究心」(大久保氏)

目標は全員達成できる 「できる，できないというのは、学習時間が短いか長いかの違いに過ぎない。レディネスをそろえれば、時間もあまり差は出てこない。プログラム学習の実践で、子どものレディネス調査を行い、不足している子には補習をして学習を実施、それを確かめることができた。」(飯沼氏)

実際に、その調査のデータも見せていただき、迫力ある科学的・実証的研究には、調査班一同感嘆。

できるとわかる 「言葉で知っているということと、実際にできるということとはちがう。言葉でわかっても(言葉で言っても)できない。できると本当にわかる。」(各氏)「できるようにする工夫、手助けをするのが教師で、そのためにはどう学習させたらよいか。学習者の立場に立って、自分ならどう考えるか、と考えて組み立てる。」(飯村氏)

教材ではなく学習材 学習者の立場から学習を考える姿勢は徹底している。「教えるのではなく、学習者自身が学ぶのである。その意味では、教師が言葉で教えるために都合のよい『教材』ではなく、学習者自身が使って、わかっていくための『学習材』でなければならない。」(倉持氏)「いまだに『教材』という言葉で考えられているというのは、情けない」という苦言も飛び出した。

教師が育つ環境—研究する雰囲気 「水海道小学校には研究する雰囲気がみなぎっていた。学校が一つの目標を持って、まとまりがあるということが大事だと思う。」(大久保氏)「戦後まもなくからカリキュラム研究をしてこられた先輩から、いろいろ学んだ。相談し話し合う仲間がいた。」学習をどう組み立てるか、日々仲間と話し合い研究したという。「酒を飲んでいても、気がつくとその話になっていた。」(各氏)「矢口先生からは、結果を教えられたということはなかった。考える背景を示してくれた。あとは、国研の研究者の方々とディスカッションした。」(大久保氏)

子どもたち一人ひとりを育てる学習、という目標をもって「教師が熱く燃えていた」と倉持氏は言う。教師たちを創造的にさせ、子どもたちをいきいきと活動させた水海道小学校(ニュース71号「水海道小学校という学校のあり方」参照)。学ぶべきものが、そこには山積している。それを掘り起こし、今に活かさねばならないと強く思ったのである。

*茨城県常総市(当時水海道市)立水海道小学校

戦後20年以上にわたり、生活からの学習カリキュラム開発とその実践活動で、全国の教育実践活動に影響を与えた。教師たちの研究実践の指導をしたのは、能力開発工学センター創立者の矢口新(当時国立教育研究所内容室長)。

調査班：榊正昭，越川求，矢口みどり

JADEC ニュース76号(2008/11)より